

時がたって気がついた、自分の原点となっていた言葉

1. 教育を考える一言

「僕にとっての最高の指導者です」

2. 背景

私は幼少のころからサッカーを行っていて、高校でもサッカー部に入部しました。ポジションはゴールキーパーです。ゴールキーパーというのは特殊なポジションで、他のメンバーとは別で練習を行います。ゴールキーパー専門の先生がいるわけではないので、必然的に上級生が中心となって練習メニューを独自に考えて練習を行うこととなります。2年時には私が練習を考え、後輩たちと練習を行っており、それぞれの課題に応じた練習を考えて、うまくいかなかったら何がダメだったかを考え改善するといったことを、授業の合間や家に帰った後に練習を考えていました。決して簡単なことではありませんでしたが、苦に思ったことはなく、そういう毎日を送っているうちに将来は体育の教師になりたいと漠然と思うようになっていました。

“教員になりたい”という想いで、私は大学に進学をしました。しかし、将来の進路を決める就職活動の時期に、ふと「自分は本当に教師がやりたいのだろうか。これまでの流れで教師になりたいと思こんでいるだけなのではないか」と考えました。そこで私は、これまで自分がやりがいを感じたことは何か、うれしかったことは何かを振り返ることにしました。このことについて考えているうちに、高校の部活動を引退する際に、ある後輩から言われた言葉が浮かんできました。

その後輩は一つ下の学年のゴールキーパーで、3年生が引退してから次の1年生が入学してくるまでは、ゴールキーパーはその後輩と自分の2人だけでした。決して上手ではありませんでしたが、私が考えた練習に真面目に一生懸命取り組んでくれて、上達していくのがはっきりとわかりました。2人で練習をし、試合が終わったら2人で反省会を行う毎日で、僕たちには他のメンバーにない強い信頼関係があったように思います。

そして私の最後の大会を迎え、私たちは志半ばで敗退し引退することになりました。その後輩はメンバー入りすることはできませんでした。集合を終えて解散をし、後輩たちと最後のあいさつをする時間になった時、私はそれまでこらえていたものがありました。その後輩を見つけた途端いろいろなことが思い出されて我慢が出来なくなりました。そして、その後輩は私に「雄二さんは僕にとって最高の指導者です」とすごくさみしそうな顔をして言いました。たくさんの想いが集約された一言のように感じ、私はこの言葉が本当にうれしくて、結果は満足できないけれど、頑張ってきてよかったと思えたのを今でも覚えています。

3. 考察

この言葉を思い出して以来、私は迷いなく教員を目指そうと思いました。きっと私にとって一番やりがいのあることは、誰かの成長に携わるということで、一番うれしいことは、その成長を実感した時にその人が見せる表情を観ることなのだと思います。そのようなことを気づかせてくれた、私にとって教員になろうと思うきっかけとなった言葉でありました。